

第4章 近代和歌山の発展



日清・日露戦争と県民

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	昭和(戦後)・平成時代

府県制・市町村制

1888（明治21）年4月、政府は市制・町村制を、次いで1890年5月には府県制・郡制を公布して、国一府県一市町村の系列に基づく地方自治のしくみを明らかにしました。このとき和歌山県は、1市（和歌山）、2町（田辺・新宮）、229村からなっていました。市・町・村が必要とする費用はすべて各市町村会の議決で決まり、徴税、徴兵、戸籍などの仕事は政府からまかされました。市・町・村は、このような国の指示や負担をやりとげる行政と財政の力を備えなければなりませんでした。この制度の基本は、第二次世界大戦が終り1947（昭和22）年の地方自治法が制定するまで変わりませんでした。

当時の和歌山県の財政をみると、予算の多いのは土木費です。1889年の大水害と、その後も頻発する災害によって負担は増えました。義務教育の普及により、教育費の負担もたいへんでした。小学校教育に関する費用のほとんどが市町村負担であったため、当時の行政担当者は財政のやりくりに苦労しました。また、各地域の利害が対立して、県会などでは、予算の配分で激しい議論がくり返され、県民も県政についてしだいに関心をもつようになりました。議員の地位も地方の有力者にとって働きがいのあるものとなり、選挙も激しくなっていきました。

日清・日露両戦争と民衆

日清戦争の戦費は約2億1,000万円で、当時の日本の1年間の予算の約2.7倍、日露戦争の戦費は19億8,400万円で、このころの年間予算の約3倍にものぼりました。日本は、2つの戦争に多くの兵士を失い、ぼうだいな国費も費やしたのです。このとき政府は、2回にわたる増税をしました。これは当然市町村の財政を圧迫しました。戦争が終わっても政府は増税をそのままつづけました。

また政府は、アメリカ・イギリスなどの外債の利子が安かったので、外国から14億円にのぼる借金をして軍備を整えました。日本は、アメリカ・イギリスなどに信用される国家になり、外債の募集がしやすくなっていました。

1908年、日本は不景気に見舞われたため、農村は困窮しました。和歌山県会は翌年、地租を軽く



日清戦争と日露戦争の記念碑（海南市下津町福勝寺境内）側面に戦死した加茂村出身兵士（日清戦争3人、日露戦争4人）の氏名が刻まれている。

するように政府に訴えています。地租を下げれば農民の生活にゆとりが出るだけでなく、商工業の発達も促すことになると、県会は和歌山県民の必死の叫び声を代弁していました。

日露戦争でなくなった兵士は和歌山県で991人、日清戦争の4倍以上の若者の命が失われました。しかし、戦争の影響が県民の日常生活のすみずみまで及んでいたことから、日露戦争の勝利に県民は喜びにわきました。一方、^{*1} ポーツマス講和条約の内容が伝えられ、賠償金がとれないことがわかつてると、政府に対する県民の不満は爆発して、「講和反対」の声が盛り上りました。和歌山市の新聞社が発起人となつて市民大会を開きました。講和反対の熱気は郡部へも広がっていました。

講和反対の声が広がっていくなか、かつて那賀郡の農民を率いて地租改正運動の反対に立った児玉伸児は、「講和条約の内容はおおむね妥当であり、かならずしも恥を受けることはない」といっています。

地場産業の興隆

繊維産業、鉄道業、銀行業などが設立がおこつくるのは、日清戦争以後のことです。会社の発達は近代的産業だけでなく、伝統的な産業でもみられました。

明治時代後期の和歌山県は、綿工業中心の工業県になっていました。特

に日露戦争後はさらに会社をつくる雰囲気が高まりました。なかでも和歌山市域の和歌川流域に紡績工場、綿ネル関連工場がつくられ、その後、化学工業がおこりました。また湯浅に醸造業、新宮には木材工場が発展しました。『日本帝国統計年鑑』によると、市制になったころの和歌山市は、福岡・熊本・岡山より大都市で、その人口は全国12番目でした。従業員約800人の和歌山紡績株式会社、約580人の和歌山織布株式会社や和歌山綿ネル株式会社などの繊維産業や、和歌山電灯株式会社が営まれており、1909年には、従業員10人以上を雇っている工場は、県全体で133工場、労働者は8,018人いました。その他、銀行や日刊新聞社なども営業しており、和歌山市は「南海の工業地」とよばれるほどになっていました。



綿ネル製造販売の広告（「和歌山県下諸商独案内」和歌山県立図書館蔵）



わが国最古のベンゼン精留装置

こうした企業の勃興は、和歌山市の商業や工業の発展をもたらしましたが、和歌山市の都市的景観を変貌させていました。それにともない、周辺部の農村は、しだいに都市への依存傾向が強くなつて行きました。農産物も都市の消費を目的にして生産するようになり、人々も日常的に都市に出入りして、新しい知識や風俗・文化を農村へもたらしました。道路の整備や交通の発達は、それを早めに行きました。

*1 アメリカのポーツマス軍港で開かれた、日露戦争の講和条約のこと。